

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の基本構造編

【第1回】文の構造・成分編

はじめに

「漢文って漢字ばかりで、何がなんだかさっぱりわかんない！」っていうのが本音の人が多いかもな。それってたとえば満天の星が、「星がうじゃうじゃあるだけで、何がなんやらさっぱりわからんし！」というのに似てるぞ。

だけども、そんな星だって、「これがオリオン座、これが北斗七星だ」とか、星座の名前を覚えたら、それっぽく区別されて見えてくるだろう？

星座の場合は、星の並びにもともと何のルールもないのを、人間が勝手に絵や図にあてはめてつくったんだが、漢文はそれとは違う。

もともと語順や表現形式にルールのある言葉なんだ。

だからそれがわかったら、もつとちゃんとした形に見えてくるぞ。

目標はそれだ！

「ただの漢字だらけ」が、「決まった形」に見えてくる、その境地を目指そうぜ。

「なるほど、だからこういう形になってるんだ…」と思えてきたら、一気に漢文を読む力はアップするぞ。返り点と送り仮名のついていない漢文だって、ごく簡単なものなら練習次第で読めるようになるぞ。

「漢文を構造的に理解する」って言えば、すぐ返り点や送り仮名に従って読むこととか、書き下し文を否定するのか？と短絡的に決めつける輩が少なくないんだが、それは違うぞ。

昔の日本人は偉いもんで、てんでわからないよその国、中国の言葉を、なんとかして読めるようにしようって、それはもう必死に努力したと思うんだ。

漢文伝来の最初は渡来人の読み書きに頼ってただろうし、日本人もそれに教わりながら、頭から当時の中国語読みというか、音読みしてたんだと思う。

それを少しずつ少しずつ、なんとかそのまま日本人にも読めるように訓点を施す技術を工夫してきた長い長い歴史があったんだろうな。

だから、漢文に返り点と送り仮名を施して読むというのは、先人達の残してくれたかけがえのない「宝物」、もう日本人の離れ業わかれわざともいべき素晴らしい技術なんだ。

ためぐち先生は、古典中国語文法という中国語の語法から君らに漢文を読む力を授けるスタンスだけど、訓読を否定する気なんてさらさらない。

ただな、「訓読でそう読んでるから、こういう意味」なんじゃない、「漢文がこういう意味だから、こう

訓読するんだ」という矢印の向きで説明する。

この矢印の向きを大切にしてほしい、一番かんじんな部分だぜ。

「理屈も何もわからん状態で、ただただAとかBとか使った句法の丸覚え」から早く脱却しよう。なるほど「この漢文、こういう意味や構造だから、こう読むんだ」って感じでいいこうぜ。

それなりに構造がわかることで、きつと君らの漢文理解の助けになると思うんだ。

頑張ろうな！

いいかい、漢文理解の第1歩は、構造の理解だぞ。

1. 文の成分（主語）

文は、**主語・述語・目的語・補語・連体修飾語・連用修飾語**の6つの成分から構成されてるんだ。

だから、まず最初にこの成分の区別ができるようになるう。

ん？成分って何？って？

ごもつとも、「成分」というのは、1つのものを構成する部分となる要素のことで、文法で使う用語としては、「一つの文を構成している一つひとつの要素」のことだよ。

たとえば、日本語で「君が歌う」だったら、「君」が主語という成分、「歌う」が述語という成分になるんだ。

わかったかい？

さて、ほとんどの文は、原則として **主語＋述部** の形で構成されてる。

まあ、主語のない文とか、主語が省略されてる文もあるけどな。

述部ってというのは、「主語がどうであるとか、どうするとかを述べる部分」をいうんだが、それに対するこの主語が日本語という主語とはちよつと違うんだ。

構造理解の最初は、まずこの主語という成分を理解することから始めよう。

漢文の主語は、早い話が「文の先頭に置かれた名詞や名詞句」だ。

「私」とか「あなた」、「これ」なんて代名詞も漢文では代詞っていうんだが、名詞に含めて考えてもいい。

「一人」なんてのは、数詞「一」と量詞「人」からなる数量詞っていうんだが、これも名詞に準じる語句だね。

ちなみに量詞ってのは、「〆年」とか「〆日」のように、事物や動作を数える単位を表す語だよ。

あと、名詞句というのは、名詞じゃないが、「〆すること・もの」とか「〆であること・もの」とかい

ふうに、名詞に準じた句のことだよ。

「君がこの件に口をだすのは、問題だ」なら、「君がこの件に口をだす（こと）」が名詞句で、主語になるわけだね。

漢文は、文の最初に名詞や名詞句を主語として示して、それがどうであるとか、どうするとか述べる形をとるんだ。

ところで、主語には4つあって、必ずしも動作主だけじゃないんだよ。

たとえば「太郎」を主語だとすると、まず、「太郎が笑った」というふうに、動作・行為をする主語のことを**施事主語**という。

事を施す主語、つまり動作をする主語って意味だね。

でも、「太郎が笑われた」となると、これは動作・行為をされる側だから**受事主語**になる。

これは、事を受ける主語ってことさ。

さらに、「太郎はかっこいい」となれば、太郎は主題として示されたわけだから**主題主語**というんだ。

「太郎についてどうであるかという」という話のテーマを示す主語だね。

まずこの3つの主語を整理しよう。

これを漢文の例でいえば、次のようになる。文の最初に置かれた名詞だというのも要確認。

項王笑。

▼項王笑ふ。

▽項王が笑う。

この「項王」が施事主語だ、太郎が項王に変わっただけ。

項王が笑うって行為をしてるだろ。

だから、事を施す主語、つまり施事主語さ、動作主を表す主語だよ。

え？それはわかるから、次行けって？ よし。

主辱。

▼主辱めらる。

▽主人が辱められる。

「辱める」は「恥をかかせる」ってこと。

「辱めらる」は恥をかかされたわけだから、「主」（主人）は受事主語になる。事を受ける主語、辱めるといふ動作・行為を受ける主語だな。いいかい？

兵少、食尽。

▼兵少なく、食尽く。

▽兵士は少なく、食料は尽きた。

この「兵」とか「食」はどうだい？

「兵」（兵士）がどうかといえば少ないわけだし、「食」（食料）がどうかといえば尽きちゃったわけだ。つまり「兵」と「食」は話の主題として示された主語だから、主題主語になる。

「兵」という主題について述べれば、とか、「食」という主題について述べればって饒舌に訳してみると、わかりやすいかな？

実は、主語には、施事主語・受事主語・主題主語のほかに、もう一つ**存在主語**というのがある。

これはちょっと難しいんで、述語と目的語という成分の話をした後で説明しよう。

◎ポイント！…文の先頭におかれる名詞（名詞句）が主語。

・主語は必ず名詞または名詞句であり、述語との関係で、4つに分類される。

- ①施事主語（動作をする主語）
- ②受事主語（受身の対象である主語）
- ③主題主語（主題を表す主語）
- ④存在主語（存在文の主語）

2. 文の成分（述語）

主語に示されたことに対して、それがどうだとか、どうするとか述べる部分を**述部**というって前に言ったよな？

この**述部**にはその**中心になる語**があって、それを**述語**という。

たとえば、主語の「太郎」が「桃をたくさん食べる」だったら、中心語は「食べる」だし、「とつてもか

「つこい」だったら、中心語は「かつこい」だ。
述部のうち、これが述語だよ。

つまり、述語は作用の及ぶ対象として目的語をとったり、修飾をつけたりするんだ。
ここではまず述語だけにしぼって説明しよう。

主語 述語

顔淵死み

▼顔淵がんえん死す。

▽顔淵が死んだ。

「顔淵」っていうのは、孔子のお弟子さんで、三千人もいたと言われる弟子の中で、一番秀才だと言われた人。

すごいだろ？

さて、その顔淵がどうしたのかっていうと、「死」んじやつたんだ。

だからこの文では動詞「死ス」が述語になる。

顔淵って人は、たまうに食べ物が入っても、すぐ貧しい人にあげちゃうんで、いわば栄養失調で死にしちゃったらしい。

酒粕さけかすとか米ぬかみたいな粗末なもんしか食べてなかったんだとさ。

主語 述語

月明ツキアカリ

▼月明つきあきらかなり。

▽月が明るい。

「月」がどうだっていうと、「明」るいんだ。

つまり形容詞「明アカリ」が述語。

ちなみに、「明」は「明らかなり」と読んでるけど、形容詞。

え？形容動詞じゃないんですか？って？

勘違いしちゃいけない、これは中国語の品詞だよ。

日本語では形容動詞けど、ためぐち先生が特に断りなく口にする品詞は、すべて中国語の品詞だ。

漢文に形容動詞はないぞ。

状態や性質なんかを表す語は、すべて形容詞に分類するんだ。

「静カナシ」も「豊カナリ」も、みんな形容詞だよ。

ほかに「富」^ふ っても、日本語では動詞だけど、中国語の品詞は形容詞。経済的に豊かであるという状態を表す語だからな。

日本語の品詞を指す時は、必ず「日本語の形容詞」って断るから、そのつもりで受講してくれよ。いい？

この2つは述語が単独のことばからなる簡単な構造だ。でも、もうちょっと複雑にしてみよう。

主語 述部

王、年少^し。

主語 述語

▼王^{わう}、年少^{としわか}し。

▽王は、年齢が若い。

「象は鼻が長い」っていう文が日本語にはあるけど、それに似た形。

「王」は文の主題として示された主題主語で、それがどうだといえ「年が若い」んだ。だから「年少^し」が述語。

でも、この述語をよくみると、「年」がやっぱり主語で、「少^し」が述語になってるだろう？つまり、述語が「主語＋述語」の構造なんだ。

これを**主述述語**という。

「主述」構造が「述語」っていう意味だが、これが「シユジュツジュツ」^{しゅじゅつじゅつ}と舌を噛みそうになるほど言にくい。言ってみな？

ちなみに漢文では「若い」ってのは「少^し」と表現する。

「少年老いやすく学なりがたし」って言葉を聞いたことがあるだろう？

「少年」って「幼い人・若い人」って意味だね。

「若」を「わかい」の意味で使うのは日本の用法だ。

漢文では使わないこともついでに覚えておこう。

3. 文の成分（目的語）

述語の後に置かれて、主に述語の作用の客体を表す名詞や名詞句を目的語という。

たとえば、「愛人」なら「人を愛す」と読んで「人」が目的語。

「月入山」なら「月山に入る」と読んで「山」が目的語だ。

君たちがわかりやすいように、英語なんかでも使う「目的語」という用語を使ったけど、中国では**賓語**という。

「賓」は「客」の意味。

述語の作用の客体になる語だから賓語というんだ。

え？「述語の作用の客体」というのがよくわからないって？

うん、なるほど、ちょっと難しい言い方だったかな… わからないことをちゃんとわかってもらう態度、いいねえ、ほめとくぞ。

述語の作用の客体といっても、述語と賓語の関係からいくつかあるんだ。

そもそも動詞の性質には、大きく分けて3つの種類がある。

他動性・依拠性・生産性の3つだよ。

他動性とは、動作主の意図的な動作の結果、対象を変化させる性質をいうんだ。

たとえば、「愛^ス」は他動性の動詞だよ。

だから、「愛^ス人^ト」（人を愛する）の場合、「人^ト」は「愛^ス」という**他動性動詞の目的語**になる。

「愛する」という行為で、いわば「人^ト」は愛され取り込まれてしまうだろう？「愛^ス」という行為が直接、他の「人^ト」に及ぶから他動性というんだ。

述語が他動性動詞の場合、その目的語は「^トを」と読むことが多いね。

それに対して、**依拠性とは、その作用が他の物をよりどころとして行われる性質をいう。**

たとえば「入^ル」は、何かを拠り所にして、それに入るといふ依拠性の動詞だ。

だから、「月入^ル山^ニ」（月が山に入る）の「山^ニ」は、「入^ル」という**依拠性動詞の目的語**になる。

「入る」という動作行為が何をよりどころにするかを「山^ニ」が示すんだよ。

「到^ル京都^ニ」（京都に到る）なんかも、「到る」という動作行為がどこをよりどころにするかを「京都^ニ」が示してるわけだから、依拠性動詞の目的語といっているね。

つまり、述語に対して、場所（^コで）・出発点（^{ヨリ}）・到達点（^ニ）、依拠の対象（^ニ）などを表す名詞や名詞句は依拠性動詞の目的語になる。

述語が依拠性動詞の場合、その目的語は「^ニに」とか「^{ヨリ}より」と読むことが多い。

そして、**生産性とは、何かを作り出す性質のことだよ。**

たとえば、「号^ス」は、何かを「名づける」といふ生産性の動詞だ。

「項梁号^ス武信君^ト」（項梁が（自分のことを）武信君と名付けた）は、述語動詞「号^ス」は「名付ける」という作用を、「武信君^ト」は「号^ス」という行為の結果の生産物を表してるだろう？

だから、「武信君^ト」は「号^ス」という**生産性動詞の目的語**なんだ。

「人云^フ賢^ト」（人々は（私のことを）賢いという）の場合も、「賢^ト」は生産性動詞「云^フ」の目的語に

なるね。

「聞^きく」(くと聞く)・「称^よぶ」(くと称する)などの「く」も、みんな生産性動詞の目的語に含まれる。

述語が生産性動詞の場合、その目的語は、「く」と読むことが多いね。

ちよつと細かいところにこだわったけど、要するに、ためぐち先生が口にする目的語はイコール中国語の賓語、述語の後に置かれる名詞や名詞句のことだよ。

どこまでも本家の文法でいくぞ。

ここでアレ?と思った人がいるだろう? 「月入^いる」の「入^いる」は「山^いに」って読むんだから、補語じゃないのか? 前に他の先生にそう習ったぞ! ってね。

確かに、そういうふう書いてある教科書や参考書もあるよね。

実際、そう教えてる先生もあると思う。

それはそれで1つの考え方、教え方としてあっていいと思うよ。

でもな、それは日本語に書き下して読んだ時、「く」とか「くより」とか読む語を補語、「くを」と読む語を目的語と定義する考え方で、要するに中国語じゃなくて日本語で考えたもんだよね。

書き下し文ってのは日本語に翻訳したもんだからな。

漢文は古典中国語、つまりよその国の古典なんだから、漢文自体の構造を日本語で考えるとあちこち矛盾だらけになるぞ。

たとえば、「出国」は「国を出^でづ」って読むから、「国」は目的語。

でも、「国より出^でづ」って読んだら、同じ「出国」なのに、急に補語に変わるのかい? おかしいだろ?

察しのいい君たちのことから、この「国」は、依拠性動詞の目的語だって、もう気づいただろ?

そういう意味では、「く」とか「くより」と読む語は、賓語の中でも依拠性動詞のものに対してそう読むことが多いということは言えるけど、結局のところ日本語での読みで解釈したもんで、中国語から考えたもんじゃないだろ?

だから、漢文の構造そのものを学ぶ時は、とりあえずそういう考え方の説明は脇に置いて、きちんと古典中国語から、述語の後に置かれる名詞が目的語だって理解してくれ。

ところで、この他動性・依拠性・生産性動詞の目的語という考え方は、昭和の初めに松下大三郎という文法学者の先生が『標準漢文法』という書で述べられたものなんだ。

この先生、ほかの学者とはずいぶん違った独自の解釈で漢文法を論じたんだけど、すぐく考えさせられることが多いんだ。

このためぐち先生も、初めて『標準漢文法』を読んだ時は、あまりの宇宙観に茫然としたもんだけど、とってもためになったというか、今も強い刺激と影響を受けてる。

『標準漢文法』には他にも色々学んだけど、ためぐち先生なりに咀嚼^{そく}して取り入れたものを、少しずつ

君たちにも授けていこうかな。

さて、いくつか例を見ていこう。

主語 述語 目的語
王^ミ好^ム戦^ツ

▼王^ミ戦^ツひを好^ムむ。

▽王は戦争を好む。

述語「好^ム」の後に置かれた名詞「戦^ツ」が、他動性動詞の目的語だ。

「好^ム」という行為が直接「戦^ツ」に及ぶ関係だね。

主語 述語 目的語
患^ハ生^ス不^フ徳^{トク}

▼患^ハひは不^フ徳^{トク}より生^スず。

▽災いは徳が備わっていないことから生まれる。

「不徳」は「徳が備わっていないこと」という意味の名詞句だ。

もちろん本来は「徳が備わっていない」という意味で名詞句じゃないが、目的語になってるってことは名詞句になってると考えるんだ。

目的語は常に名詞か名詞句と考えるとわかりやすいだろう？

さて、この文、「災いが生じる」ということが、何をよりどころとしているのかを「不徳」が表しているんだろ？

だから、「不徳」は依拠性動詞「生^ス」の目的語で、別の言い方をすれば、述語「生^ス」の起点を表しているんだ。

述語 目的語 述語 目的語
転^テ禍^ハ為^ス福^フ

▼禍^ハひを転^テじて福^フと為^スす。

▽災いを転じて福にする。

この例はおもしろいぞ。

「禍」^ヒ「福」はそれぞれ述語「転」^ス「為」^スの目的語なんだけど、「禍」^ヒは他動性の動詞述語「転」^スの目的語なのに対して、「福」は生産性の動詞述語「為」^スという行為の目的語になってる。目的語にも色々あるわけだよ。

主語 述語 目的語
将軍 戦 河北。

▼将軍は河北に戦ふ。

▽将軍は黄河の北で戦う。

今度は、目的語「河北」が述語「戦」という行為が行われた場所を表してる。

これは何性動詞の目的語だい？

そう、「将軍が戦う」という行為が、「河北」という場所をよりどころにしてるわけだから、依拠性動詞の目的語だよ。

場所は場所でも、次のような例もあるぞ。

主語 述語 目的語
漢王 至 洛陽。

▼漢王洛陽に至る。

▽漢王は洛陽に到着した。

目的語「洛陽」は場所でも、前の例とは違って、述語「至」^ルに対して帰着点を表しているんだ。

これも依拠性動詞「至」^ルの目的語だよ。

ちなみに、依拠性動詞の後に、直接置かれる場所を表す目的語は、**場所目的語**っていうんだ。

中国では「処所賓語」っていう。

こんなふうに、ひとくくりに目的語といっても、色々あるけれども、要するに「述語の後に置かれた名詞や名詞句」が目的語だ。

そのことをまず押さえておけばいい。

他動性動詞の目的語とか依拠性動詞の目的語、生産性動詞の目的語って、小難しく分けて説明したけれども、あんまりこだわらなくてもいいよ。

ただ、特に依拠性の理解は、後で前置詞を学ぶ時に、ちょっと役立つかもしれない。その時思い出してくれ。

それから、もう一度、用語の話なんだけど…

述語の後に置かれた名詞を、「くを」と読むから目的語、「く」にか「より」と読むから補語というふうには、日本語としてどう訓読するかで、目的語と補語と用語の名前を分けてと呼びかえる必要はないというか、やめといたほうがいい。

後で説明するけど、「補語」は古典中国語では、全然別の成分を指す用語だからね。

それにさ、訓読のしかたで、いちいち目的語とか補語とか区別しなくていいわけで、ある意味楽だろ？

いいかい、みんな、述語の後に置かれて、その作用の客体になってる名詞や名詞句、それが目的語なんだから。

おやおや、一所懸命ノートに写してるけど、ちゃんと頭のノートに書いとけよ！

◎ポイント！…漢文の基本構造は **述語＋目的語**。

…述語は主語がどうするか、どうであるかを述べる語で、動詞や形容詞が多い。

…目的語は述語の後に置かれる名詞や名詞句（くすること・くするもの）。

・述語は **述語＋目的語** の形をとることが多い。この **述語＋目的語** の構造は漢文の基本構造であり、どんなに複雑に見える漢文も、そのほとんどがこの **述語＋目的語** に帰結する。

・この **述語＋目的語** を述語構造という。

ところで、主語の話のところで、主語にはもう一つ **存在主語** というのがあるって言ったよね？

ここでいよいよそれについて説明しよう。

ちよっと頭がグラグラするかもしれないから、気をひきしめて聞けよ

漢文には、**存在文** という文の形式がある。

「どどこどこに誰々がいる」とか「どどこどこに何々がある」とかいう、人や事物の存在を表す文だ。たとえば、「山のてっぺんに大きな池がある」というのを漢文で書くと、次のようになる。

主語 述語 目的語

山頂 有 大池。

▼山頂に大池有り。

▽山頂に大きな池がある。

この「山頂」が存在主語で、「大池」が述語「有」の目的語だ。
ほら、頭がグラグラし始めただろ？

それは日本語で考えてるからさ。

日本語に訳すと「大池」が主語のように見えるけど、「有」ってのはもともと「もつ」という意味の動詞なんだ。

君らが「消しゴムある？」ってひとに聞く時、それって「消しゴムもってる？もってたら貸して」って意味だろ？

つまり、日本では「もつ」を「ある」とも表現する。

古代漢語の「有」も、もともと「もつ」という意味の語で、「AがBをもつ」なら「A有B」の語順になる。

たとえば、「私がお金をもつ」なら、「我有錢」だ。

それって、つまりは「私にはお金がある」とも言い換えられるだろ？

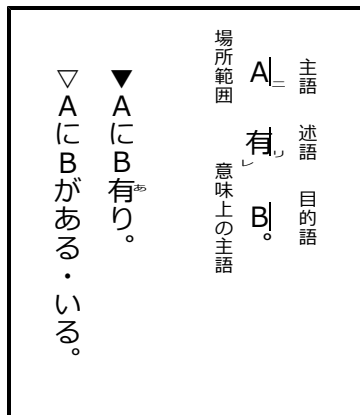
存在文の形式はそうやって生まれたんだ。

ちなみに「我有錢」は「錢をもつ」ということだから、もともと「錢」は「有」の他動性の目的語だったんだね。

だから、この文も「山のとつぺんが大きな池をもっている」と読みかえれば、「山頂」が主語、「大池」が「有（もつ）」の目的語だと納得できるはずだよ。

中国では、このような文を人や事物の存在を表す文として、存在文と読んでいるんだ。

さて、存在文の構造をちゃんと説明すると、次のようになる。



存在文の目的語は意味上の主語になり、構造上の主語はその意味上の主語が存在する場所や範囲を表すんだ。

つまり、さっきの例なら、目的語「大池」が意味上の主語になり、構造上の存在主語「山頂」は、その意味上の主語「大池」が存在する場所を表すことになるわけ。

どう？わかったかな？

わかるまで何度でも読み返せよ。

「どこどこに何々がある・いる」が存在文なら、「どこどこに何々がない・いない」も当然存在文だ。つまり、「山頂無大池」も存在文ってわけ。わざわざ不存在文だなんていわないんだぜ。

ところで、これで大事なことが一つわかるな。

この「無」は「なし」と日本語の形容詞として読んでるけど、実は「存在しない・もたない」という意味の動詞だぞ。

まあ、「有」の反対なんだから当然だけどな。

頭を古典中国語にしろよ、日本語に引きずられるな！

ところで、「文の先頭に置かれる名詞が主語」、「述語の後に置かれる名詞が目的語」という鉄則を頭に入れた君たちは、この存在文も例外ではないことがわかったと思うけど、教科書や参考書がこの形式については沈黙しているのがおかしいと思わないかい？

特殊な形という場合もあるよな。

それは、たとえば「有_レ人」（人がいる）が、日本語では「人」が主語、「有り」が述語になってしまつて、漢文は「主語＋述語」の語順だと説明した手前、都合が悪いからなんだ。

なにしろ「人」が下になつちやつてるからねえ。

日本語で漢文を理解したり、教えるようにすると、こういう矛盾にぶつかっちゃうわけ。気をつけようぜ。

4．文の成分（連体修飾語・連用修飾語）

漢文の基本構造は、「主語＋述語＋目的語」。

これだいたいこのことは表現できてしまう。

「太郎が桃を食べる」は、漢文で書くと「太郎食_レ桃」だけど、これだけでも、なんとか言いたいことは伝えられるだろう？

でも、もうちょっといろんなことを表現したい場合だつてあるよな？

たとえば「太郎が大きな桃を食べる」とか、「太郎がまた桃を食べる」とかさ。

あるいは、表現できないことだつてあるんだぜ。

たとえば「太郎が桃を食べない」とかね。

まさか「太郎食_レ桃」って、強引に読むわけにもいかないだろう？

だって、「太郎食桃」は、それだけで「太郎が桃を食べない」という意味には絶対にならないんだからさ。

さあ、どうする？

うん、そういう時に威力を発揮するのが修飾語なんだ。

修飾語には、主に名詞を修飾する**連体修飾語**と、動詞や形容詞を修飾する**連用修飾語**がある。

これらの**修飾語は修飾される語の前に置かれるんだ**。

さあ、ここで頭を整理してくれ。

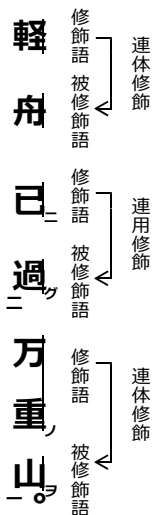
前にこう言ったろ？ 「文の先頭に置かれる名詞や名詞句が主語」、「述語の後に置かれる名詞や名詞句が目的語」って。

つまり、名詞を修飾する**連体修飾語は、主に主語や目的語を修飾するんだ**。

一方、述語は動詞や形容詞であることが多いから、**連用修飾語は主に述語を修飾することになるんだよ**。

◎ポイント！…構造的な修飾語は被修飾語の前に置かれる。

・修飾語は名詞を修飾するときも、動詞などを修飾するときも、構造的に被修飾語の前に置かれる。体言を修飾する語句を連体修飾語（句）、述語を修飾する語句を連用修飾語という。



▼軽舟已に万重の山を過ぐ。

▽軽い舟はすでに幾重もの山を過ぎてしまった。

この例がわかりやすいかな？

この文、修飾語を全部とつばえば、「舟過ぐ山」（舟山を過ぐ）になる。

「軽」「已」「万重」はみんな修飾語で、それぞれの被修飾語の前にちゃんと置かれてるだろう？
大事なのはその次だ。

「軽」「万重」は「舟」「山」を修飾してるから連体修飾語、「舟」は主語、「山」は目的語でそれぞれ名詞だからね。

それに対して、「已」（すでに）が修飾しているのは述語動詞「過ぐ」で連用修飾語になるんだ。

このように、**主語や目的語を修飾する連体修飾語は、主に形容詞や名詞。述語を修飾するのは主に副詞で、**

同じように見える漢字にもそれぞれ役割があるというわけだ。

さっきの桃の話、漢文にすると次のようになる。

太郎食_二大_一桃。

(太郎が大きな桃を食べる。)

太郎復_レ食_二桃。

(太郎がまた桃を食べる。)

どうしてこんな語順になるのか、わかるまでよく漢文を見ろよ。
主語・述語・目的語を見分けるのが鍵になる。

もし、右の「太郎食_二大_一桃」の語順を入れ替えて、次のようにすればどういう意味になる？

太郎大_二食_一桃。

どうだい？わかったかい？

もし「大きな桃」なら、「大」は「桃」の直前に置かれるはずだろう？
でも、「食」の前に置かれてる。

ってことは、「大」は述語動詞の「食_二」を修飾してるんだな。

つまり「大きな」っていう形容詞の働きじゃなくて、「おいに」という副詞の働きで述語を修飾するわけだ。

日本語では、「君たち、大いに桃を食べてくれ」なんて、述語を直接修飾する語が、離れた位置に置かれることもあるけど、漢文では基本的にはすぐ前に置かれるんだよ。

つまり、この文の意味は？

そうそう、「太郎がおおいに桃を食べる」って意味だね。

「太郎大_二食_一桃」って読むことになる。

じゃあ、「太郎桃を食べない」はどうなるのだった？ いい質問だ。

太郎不_レ食_二桃。

(僕は桃を食べない。)

これは実はさっきの「太郎復_レ食_二桃」と同じ構造だというと、びっくりするかな？

でもな、「不」は「ず」と読んではいるけど、古典中国語では否定を表す副詞。

「復_レ」と表す意味が違っただけで、ひとしく述語を連用修飾する副詞なんだ。

だから述語動詞「食_二」の前に置かれてるだろう？

あえて副詞っぽく訳せば、「太郎が、しないこととして桃を食べる」から「桃を食べない」って意味になるんだよ。

考えてみるよ、身の回りで「不」のつく熟語って色々あるけど、みんな否定される語の前だろ？

「不屈」（屈しない）とか「不通」（通じない）、「不定」（定まらない）とか。

日本語の漢字熟語と中国語では違つところもあるけれど、性質をよく受け継いでるんだよ。

実は、副詞の理解は、漢文のハードルクリアの一つなんだ。

なぜかというと、述語を修飾する副詞には、将来を表す時間副詞「将」（まさしくントす）や、否定を表す否定副詞「不」（くず）、反語の語気を表す語気副詞「豈」（あこ）など、そりゃまあ色々あるからだよ。

我 常^{じょう} 読^よ 書^{しよ}。
（私は常に本を読む。）

我 将^{しょう} 読^よ 書^{しよ}。
（私は本を読もうと思つて。）

我 不^ふ 読^よ 書^{しよ}。
（私は本を読まない。）

我 豈^あ 読^よ 書^{しよ}。
（私はどうして本を読むだろうか。）

これらは表現は異なるけど、副詞がみんな同じ位置に置かれてるだろう？
そこをきちんと確認してくれ。

◎ポイント……副詞は通常述語の前に置かれて述語を修飾する。

・副詞が重要な鍵になるのは、否定（不く・非く等）・禁止（勿く・母く等）・反語（豈く・安く等）・限定（惟く・独く等）・推定（蓋く・或く等）の形。みな同じ位置に置かれる。

5. 文の成分（補語）

さつき述べた連体修飾語や連用修飾語は構造的な修飾語で、必ず修飾される語の前に置かれるんだが、漢文にはもう1つ後置される修飾語という考え方がある。

これは、**述語や述語＋目的語の後に置かれて、後から述語を補足的に修飾する語や語句のこと**で、これが古典中国語の**補語**なんだ。

よく高等学校の授業では、訓読で「ゝに」とか「ゝより」と読む語のことを補語と教えることがあるんだけど、それとは全く違うんだ。

それは訓読、つまり日本語でどう読むかで名称が変わるんだけど、今ためぐち先生が言った「補語」とは、中国語における文の成分で、日本語でどう読むかは違うんだ。

補語とは後置修飾語で、後に置かれた程度を表す語や、数量を表す語が、結果的に述語に意味を補うわけで、意味的に修飾するともいえるかな。

漢文は本来、上の語が下の語を修飾するのが基本だから、下から上、後ろから前を修飾するという考え方はそのルール違反になる。

その意味で、この補語という考え方には異論もあるし、実はこのためぐち先生も、本当にそう考えるべきなんだろうか？ 特に、これから具体的に取り上げる例なんかは、別に主述構造として捉えればいいんじゃないのか？と、内心疑問を感じないでもないんだが、古典中国語文法のスタンダードな考え方として、紹介しておこう。

帝 怒^ル甚^シ。

▼帝怒ること甚だし。

▽皇帝はとても怒る。

これは述語「怒^ル」の後に程度を表す語「甚^シ」が置かれる形だ。

訓読では「怒ること甚だし」と読んでもいるわけで、「怒^ル」と「甚^シ」は、まるで主語と述語の関係のように見えるよね。

それに従えば「皇帝は怒ることが甚だし」になるんだが、まあ、じゃっかん不自然といえば不自然な訳だろう？

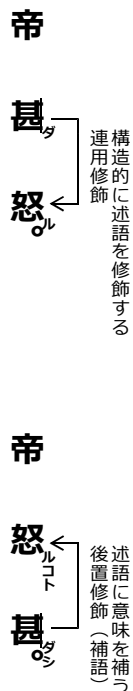
古典中国語でも、もともとは「怒^ル」と「甚^シ」が主語と述語の関係で、「怒甚^{ルシ}」の部分がいわゆる主述語だったんだろうと思うんだ。

でも、それはつまりは「とても怒る」ってことだろう？

だから、動詞述語「怒^ル」の後に置かれた「甚^シ」は、「怒^ル」に意味を補充して修飾すると考えるようになったと思う。

「甚^シ」は「怒^ル」の程度を補充するから、**程度補語**というんだ。

「帝甚怒^{ルシ}」と「帝怒甚^{ルシ}」の修飾構造を比較すると次のようになる。



この2文、表す意味自体は変わらないし、どちらの表現も実際に用例としてある。

あえて2つの文を比較すると、漢文は後に置かれた語に重点が置かれるという特徴があるから、「帝甚怒」は「怒」に、「帝怒甚」は「甚」に重きが置かれた表現かな。

でも、君らはそこまで意識しなくても大丈夫だぜ。

述語に意味を補う
←
述語 数量補語
不_レ食_ハ三日_ヲ

▼食_クらはざる_キこと三日_ニなり。

▽三日間食_ベていない。

これも「食べないことが三日である」が本来で、つまりは「三日間食_ベていない」って意味だろう？
だから、述語「不_レ食_ハ」の期間がどれぐらいかというのを、後の「三日」が補充して考えると考えるんだ。
こういうのを**数量補語**っていう。

さて、この述語の後に補語が置かれる形は、「_クすること…」と読まれることが多いのに気づいたかな？
この表現はもはや日本語の中にも生きてるんだぜ。

「独学すること三十年、ついに真理を得た」なんて、普通に言うだろう？

補語には、程度補語や数量補語以外にも、状態や様子を表す**状態補語**、結果を表す**結果補語**、可能を表す**可能補語**なんてのがあったが、それについては、ためぐち先生の名著「真に理解する漢文法」を読んできれたまえ。

◎ポイント！…補語は述語や述語構造の後に置かれて、補足的に述語を修飾する。

・通常の補語は「A_{スルコトナリ}」と読まれることが多い。

どんなに複雑な漢文でも、ほとんどがこれまでの講義で述べた6つの成分で説明できる。

それがわからないと、結局のところ漢文がわかるとはいえない。

何事もスタートが肝心、この成分の理解をまず徹底しようぜ。

6. 特殊な構造の文（兼語文：①使役の兼語文）

ほとんどすべての文が6つの成分で説明できると述べたけど、一見するとうまく説明できない構造の文が実は2つあるんだ。

1つは兼語文、もう1つは二重目的語の文だ。

まず、兼語文から説明しよう。

使役の形として有名な次の文を見てほしい。

天帝使_三我_二長_二百獸_一。

▼天帝我をして百獸に長たらしむ。

▽天帝は私に百獸に（対して）長とさせている。

「狐虎の威を借る」で有名な文だから、聞いたことがあるだろう？

虎に捕まった狐が、食べられては大変と、巧みに虎をだました言葉だね。

さて、この文は、いったいどういう構造になっているのか、考えてみよう。

文の先頭の名詞が主語だから「天帝」が主語だというのはわかると思うけど、述語はどれだい？ 目的語は？ わからないだろ？

実はこの文は兼語文といって、2つの文が1つになったものだと考えられている。

これには異論がないわけでもないんだけど、現在の語法学における主流の考え方だね。

兼語文の形式をとって使役を表す文を、**使役の兼語文**という。

1つめの文がこれ。

主語 述語 目的語

天帝使_レ我_ヲ。

▼天帝我を使_ハす。

▽天帝が私を使役する。

「使」は日本語の使役の助動詞「しむ」として読んでもいいけど、実は「使役する」という意味の動詞なんだ。便宜上「しす」って読んだけど、「つかフ」だって別にいいぞ。

要するに使役動詞だ。

動詞だからその使役対象「我」を目的語にとってるんだよ。

そして2つめの文がこれ。

主語 述語 目的語

我^ガ長^{ナガ}百獣^{ヒャクジュウ}。

▼我^ガ百獣^{ヒャクジュウ}に長^{ナガ}たり。

▽私は百獣に（対して）長となる。

「天帝」に使役された「我」が今度は主語だ。

つまり、兼語文って、「1つめの文の目的語が2つめの文の主語になって、1文になったもの」のことをいうのだ。

そしてその目的語と主語を兼ねる語を兼語というんだ。

この文をいかにも兼語文とわかるように訳すと「天帝が私を使役し、その使役される私が百獣に長となる」となる。

つまり結果的には「天帝が私に百獣に対して長とならせる」という使役の意味になるわけさ。

ここで大事なのは、「兼語は必ず使役動詞の直下に置かれる名詞」だということだ。

1つめの文の目的語なんだから当然だろう？

さあ、テストだよ。

次の文は「呉が使者に仲尼に問わせた」、つまり呉の君主が使者をつかわして孔子に質問させたって意味。

「仲尼」は孔子の字（実名以外に成人してつける名だ）だよ。

さて、「使^シヒヨシテ」と読むのは、どちらの「使」だい？

呉使使問仲尼。

←
呉使^シ使^ム問^ハ仲尼^ニ。

呉使^ム使^シ問^ハ仲尼^ニ？

さあ、どっちの読み方が正しい？どうだ、どうだ！

そう、もちろん下の方のだよな。

「使者を使役して、その使役される使者が仲尼に問う」だから、当然下の方の「使」が使役対象になるわけだ。

「使^ス使^シ」だよ。

使役対象の「使^ス」（使者）は動詞「使^ス」の目的語だから、下に置かれるのが当然。
いいかい？これ、とっても重要だぜ。

「ヲシテ」を付けて読む語は、必ず使役動詞の直下に置かれる！

丸覚えじゃなくて、なんでか？というのを添えて覚えとけ！

ところで、この使役の兼語文でややこしいのは、この「使^ス」とか「令^シ」が使役動詞なのに、訓読では日本語の「させる」という意味の助動詞「しむ」と読んでいる点。

日本語の読みと漢文の構造にズレがあるからわかりにくいんだ。

たとえば、さっきの例文の使役動詞を「命^ス」にかえた次の文を見てください。

天帝 命^シ我^ニ長^ニ百獣^一。

▼天帝我^ニに命^スじて百獣^ニに長^スたらしむ。

▽天帝は私に命じて百獣に（対して）長とさせている。

察しのいい諸君はもうおわかりだと思っけど、これって実はさっきの例文と全く同じ構造だよ。

主語 述語 目的語
天帝 使^ス我^ニ。

主語 述語 目的語
天帝 命^ス我^ニ。

主語 述語 目的語
我^ニ 長^ス百獣^一。

主語 述語 目的語
我^ニ 長^ス百獣^一。

天帝 使^ス我^ニ長^ニ百獣^一。

天帝 命^ス我^ニ長^ニ百獣^一。

何が違うかっていうと、要は「使^ス」「令^シ」は助動詞「しむ」と読み、「命^ス」はサ変動詞「命ず」として読むという日本語側の事情が違うだけだよ。

「使^ス」「令^シ」も「命^ス」も、ひとしく使役動詞だし、どちらも実は同じ構造の兼語文なんだ。

ただ、訓読の読み分けにもなるほどな…と思わせる面はあるんだ。

「使^ス」とか「令^シ」は一般的な使役を表して具体的な動作がはっきりしないのに対して、この「命^ス」は「命令する」という意味だし、同様に「遣^ス」は「派遣する」、「勸^ス」は「勧める」というふうに具体的な使役動作がはっきりしてるんだよ。

もとの意味がぼやけちゃうことを虚化^{虚化}っていうんだけど、「使^ス」「令^シ」は虚化した動詞なんだね。

そう考えれば、訓読で「使^ス」や「令^シ」を「しむ」と読むのも、これはこれでなかなか適切な日本語訳なのかもしれない。

◎ポイント！…兼語式の文とは、本来二つの文が一つになった文で、一つめの文の目的語が二つめの文の主語になる文。

使役の兼語文は、使役動詞「使」や「令」の直下の名詞が兼語で、使役される対象を表す。

・使役動詞が「使」「令」の時は、「A 使_レ B_ヲ C_ニ」と読む。使役動詞の直下の名詞 B に「ヲシテ」をつけ、使役動詞を「しむ」と読む。

・使役動詞が「命」「勸」などの時は、「A 命_レ B_ニ C_ヲ」と読む。C に「しむ」をつけて読む。

・使役動詞の直下に名詞がない時は、兼語は省略されている。

7. 特殊な構造の文（兼語文…②存在の兼語文）

1つめの文の目的語が2つめの文の主語になる文のことを兼語文っていうんだが、もうひとつ存在の兼語文っていうのがある。

これを理解するには存在文の知識が必須。

自信ないやつは、もう一度存在文のところを読み直しとけよ。

普州_ニ有_リ人_ノ化_シ為_ル虎_ト。

▼普州_ニに人の化_シして虎_トと為_ルる有_リ。

▽普州に変化して虎となった人がいた。

存在の兼語文は、この例なら、1つめの文が「普州_ニ有_リ人_ノ」で、これが典型的な存在文。覚えてるかい？

「人」は主語じゃなくて目的語だけ。

この目的語「人」が2つめの文「人_ノ化_シ為_ル虎_ト」の主語になるんだ。つまり、「人が存在して、その存在する人が変化して虎になる」って意味さ。

「人」は前の文の目的語であり、後の文の主語になるから兼語だ。

要するに、前文と後文が兼語「人」を介して1文化するんだよ。

これを図にすると、次のようになる。

主語 述語 目的語
普州_二有_レ人。

←

主語 述語 目的語
人_一化_レ為_ル虎_ト。
(兼語)

存在の兼語文は、日本語で読むとき2通りの読み方があるんでややこしい。
次のような読み方もできるんだな。

普州_二有_レ人_一化_レ為_ル虎_ト。

▼普州_二に_レ人_一有_レり化_レして虎_トと為_ルる。

どっちの読み方が正しいと決まってるわけでもないんで、2通りあるんだと思っていけば十分。
読み方を変えたからってもちろん原文の意味が変わるわけでもない。

ところでこの形、どっかで見覚えがあるだろ？ ほら、『論語』の冒頭の有名な一文さ。

有_レ下_下朋_一自_二遠_二方_一来_上。

▼朋_二の_一遠_二方_一より来_上たる有_レり。

▽遠くから来た友達がいる。

超有名で、うちの息子は1歳の時に風呂の中で暗誦してたぞ。

君らもちっちゃい頃、そうやって覚えたんじゃないのかい？ え？先生の子供とは違います！って？

はは…

ところでこれを、中学校なんかで次のような読み方で習った人もいるんじゃない？

有_レ朋_一自_二遠_二方_一来_上。

▼朋_二有_レり遠_二方_一より来_上たる。

「自遠方」（遠くから）という前置詞句が使われてるからちよつと難しいが、この文も「有_レ朋_一」（友達がいる。）が二つめの文。

その存在文の目的語「朋」が、兼語として次の文「朋自_レ遠方_一来_ル」（友達が遠くから来る。）の主語になつて兼語文だ。

どっちの読み方だつてかわからないし、意味ももちろん変わらない。

ためぐち先生としては、後の方の読み方が簡潔かつリズムがあつて、好きかな。

ところで、これは存在の兼語文に限ったことじゃないんだが、そもそも存在文は存在主語がはっきり表現できないこともあるから、「有_レB_一C_{スル}」のように、範囲や場所を示す主語、つまり存在主語が置かれなかったことである。

ほら、日本語でもさ、「昔々、おじいさんがいました」って文に、え？どこに？と問いかけても意味がないだろ？

元々そんなことどうでもいいというか、わかんないことなんだから。

そういう場合は主語を置かないから、無主語文っていうんだ。

◎ポイント！…存在の兼語文は、存在を表す動詞「有」や「無」の直下の名詞が兼語で、その存在する人や物が実際に何かをするという構造をとる。

・「A_一有_レB_一C_{スル}」の形で、「CするBがいる・ある」という意味を表す。Aが省略される、またはAが表現できないこともある。

8. 特殊な構造の文（二重目的語の文）

普通、文は述語に対して1つの目的語を置くんだが、表現によっては2つ目的語が置かれることがある。

1つの述語に対して2つ置かれる目的語のうち、先に主に「誰に」、続いて「何を」にあたる目的語を置く文を「二重目的語の文」という。

中国では双賓文_{（しゅうひんぶん）}っていうんだ。賓語が2つの文ということで、同じ意味だな。

他動詞は、「何を」とその客体を示す性質があり、これを他動性という。

また、「誰に・何に」と、何に依存して動作をなすかを示す性質もあつて、これを依拠性_{（いこせい）}という。依拠性_{（いこせい）}つて、前に目的語のところで触れたよな？

他動詞の中には、この依拠性が強いものがあるんだ。たとえば「与_レえる」という意味の動詞「与_レ」_{（よ）}なんかそれ。

「何を与える」「誰に与える」の意味も表すけれども、「誰に与える」という依拠性が強い動詞なんだよ。だから、先に「誰に」にあたる目的語をとる。つまり、次のような語順になる。

	誰に		何を			
主語	+	述語	+	間接目的語	+	直接目的語

この依拠性の強い他動詞には色々あるけど、代表的な種類を2つぐらい覚えておいてもらおうかな。まず1つめは「授与関係を表す動詞」が述語の場合だ。

述語 間接目的語 直接目的語

与_二若_一 茅_一。

▼若_二に茅_一を与_ふ。

▽お前たちにトチの実を与える。

「朝三暮四」で有名な文だよ。

猿に与える餌のトチの実を減らそうとして、もともと朝も夜も4つずつ、計8つあげてたところを、「お前たちにトチの実をやるが、朝3つ夜4つにする。どう？」って聞く場面さ。

この文では猿だから「誰に」というのは、ちと語弊があるが、まあ間接目的語「若」（おまえたちに）が先に置かれて、その後に事物目的語「茅」（トチの実を）が置かれているだろう？

この語順はひっくり返すことができないんだ。「与」って動詞は依拠性が強いからね。

他に「授」「賜」「遺」などの授与関係を表す動詞も、この語順をとる、まずこのことを押さえよう。

次に「教示関係を表す動詞」、つまり「教える」とか「示す」とかいう動詞が述語の場合も二重目的語の文になる。

主語	述語	間接目的語	直接目的語
項梁	教	籍	兵法

▼項梁籍に兵法を教ふ。

▽項梁は籍に兵法を教えた。

「籍」というのは漢楚の興亡で名高い項羽の名、「項梁」はそのおじさんだ。

そのおじさんが項羽に兵法を教えたわけ。

この場合もまず「誰に」にあたる間接目的語「籍」が置かれて、その後に「何を」にあたる直接目的語「兵法」が置かれてるだろ？

それは述語動詞「教」が教示関係を表す動詞だからさ。

この教示関係を表す動詞には、他に「示^{しめ}」「告^つ」「語^ご」などがある。

◎ポイント！…授与・教示を表す動詞が述語の時は二重目的語の文になる。

・二重目的語の文は、必ず次の語順をとる。

主語 + 述語 + 間接目的語 + 直接目的語

これで文の基本構造、成分のお話はおしまい。第1回の講義はここまでだ。よく復習しとけよ。